
ASKED RIDER'S -PEACH MOON STORY-

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M A S K E D R I D E R ' S - P E A C H M O O N S T
O R Y -

【Nコード】

N 0 3 3 7 I

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

私立桃月学園に転入した少年・渡瀬煌二。平和でゆるい桃月ライフを満喫…というわけにもいかなかったようで、実はその裏には激しい戦いがあった…。煌二は日常を守るため、今日も叫ぶ…。
「変身ッ！！」
『

1 - 渡瀬煌二 - (前書き)

はじめまして、作者の柳雨と言います！申し訳ありませんが注意点が二つあります。一つは他の小説もやってるため基本、不定期連載あるいはランダムになります。そしてもう一つは主人公を含め、ライダーに変身するのはオリジナルキャラとなります。色々あるかもしれませんが暖かい目で見守ってください…柳雨でした！

1 - 渡瀬煌二 -

- 私立桃月学園…桃月町という町にある至って普通の男女共学の高校…

(今日からここが僕の新しく通う学校になるのか)

- 桃月学園の校門をくぐり、髪を後ろに小さく結んだ少年・渡瀬煌二は校舎を軽く見つめて、入っていく

(平和でいいなあ…と、職員室どこだろ?)

- 煌二は校内をウロウロしてると…

「お前が転入生の渡瀬か？」

「え…そうだけど…」

- …チビッコが声をかけてきた

- 腰にまで届く長い金髪、外国人なのか両眼は碧眼、そしてやる気の無い態度と声…ついでに何気に呼び捨て…

「お前の担任のレベッカ宮本だ、ほら、1-C組行くから一緒に来い…」

「…チビッコが何故高校に???」

「ムキー！チビッコ言っなーッ!!」

レベツ力は煌一の言葉にキレた

（怒っちゃった…担任と言ったな…チビッコが先生…）

ムスツとした不機嫌顔でレベル力はズンズン進む

「ちっち来い！」

「わ！？ごめんなさい！」

- そして煌二はついに1-C組に辿り着く…
- 1-C組

レベルが煌々を連れて教壇につく

「はいはい、皆注目、転入生だぞ」

「お！」

・煌二のを見て全員解りやすい反応を見せる

「渡瀬煌二と言います……よろしくお願いします！」

「はいはい！私、質問！」

「早ッ！？」

・アホ毛の少女・片桐姫子が元気良くいきなり色々すっ飛ばして質問してきた…

「渡瀬君はカニは好き？」

「…僕はエビ派」

「ガーン!!」

・姫子はショックを受けた

「アホだな姫子…」

・長い艶やかな髪に漫画メガネの少女・橘玲は放心状態の姫子に呆れていた

「つたく、もうちょっとマシな質問しなさいよね!」

・メガネにデコが目立つ様に分けられた赤毛の髪が特徴の上原都が怒った様に言う

「んじゃゝ次はあたし!趣味は何？」

・三つ編みの茶髪に、見た目地味っぽい桃瀬くるみが次に煌二に質問してみた

「外へ出掛けることですかね…旅行とか、後最近料理を、親元離れて一人暮らしなんで…(地味に無難な質問…)」

「今私に『地味』って言った!？」

(え?なんで解ったの!?)

・煌二は心の中で大変驚いた

「はい、学級委員の一条です」

「あ、質問ですか？どうぞ」

・吸い込まれる様な黒い瞳におさげが特徴的な学級委員の一条が手を挙げる

「いえ、特に質問はありません」

「はい…？」

「学級委員の一条でした」

・質問も無いのに手を挙げた一条の不可解な行動が理解出来ず、頭に『？』を巡回させながら『不思議さん』という印象を持った

「じゃあ質問はこのへんで、渡瀬、お前の席は6号の隣りな」

「6号？（ロボットでもいるのか？）」「あ、私です」

・ツインテールのおとなしそうな少女が手を挙げて自分の場所を知らせる

「よつと…よろしくね、6号さん」

「はい」

「よし、じゃ、このまま授業やるか」渡瀬は教科書6号に見せて

もらえ」

・煌二が席に着いたのを確認し、レベッカはそのまま授業を開始

「えー！？そりゃ無いよベッキー！！」

「うるさいぞ姫子！静かにしろ！」

「マホー…」

・レベッカが注意すると姫子は落ち込み、アホ毛がしおれる

「ベッキーって？」

「あ、宮本先生のニックネームです」

「へ」

「渡瀬と6号！！お前らもだ！！」

「「ごめんなさい！！」」

・レベッカ改めベッキーは二人も注意、クラス中、ドツと笑いが込み上がる

（楽しいクラスで良かった…いつまでもこんな日々が続くと良いな）

・煌二は静かに笑みを浮かべた…一方、校舎…正しくは校舎の中の煌二を見つめる『モノ』達がいた…

「人間八人間ノママデ良イ…」

「人ガ『神』ニ近ヅクナド、アツテハナラナイ…」

・それらは全て人ならざる姿をした異形…

・背中には小さな翼、貝殻と羽根を組み合わせたかのようなシンボル、そして頭上には光輪…

・桃月学園に転入した渡瀬煌二…彼の新しい日常と出会い、そして迫る影…波乱の学園生活が今、スタートした

1 - 渡瀬煌二 - (後書き)

1、主人公達はベッキー達1 - C組に無事転入しました。しかし、それを見据える謎の影が狙う…と言いたいところですが実際に戦うのは先になると思います…次回は他のクラスのキャラなどが登場します。お楽しみに！

2 - 愉快的仲間達 - (前書き)

今回はC組メインですがその他のぱにぽにのキャラが何人か出ます
：

2 - 愉快的仲間達 -

「ねえ、6号さん…」

「はい、なんでしょうか？」

- 昼休み、煌二は弁当箱を開きながら隣りの席の6号に質問をする

「宮本先生…だったね、なんでチビッコが先生をしてるの？」

「それはですね…」

- 6号の説明によると…

- ベッキーはアメリカのMIT（マサチューセッツ工科大学）に入
学・卒業するほどの天才少女であり、それがどういう心境の変化か
…この桃月学園に教師として赴任したという…

「色々と凄い経歴だね…なんか、納得…」

「何、何！！ベッキーがどうしたのカナッ！？」

「学級委員の一条です…」

「うわッ！？あなた達はさっきのアホ毛さんと不思議さん…！」

- 突然、姫子と一条が会話に参加してきたため、煌二は驚いた…

「マホ？いやアホ…？ひどいよ渡瀬君、あ、私は片桐姫子、よろ

しくね!」

「あ、これはどうも御丁寧に…」

「学級委員の…」

「一条さんでしょ? 何度も言われれば覚え…」

「…かもしれませんよ?」

「何故に疑問系…? (やっぱり不思議さんだ…)」

・いきなりの自己紹介にも戸惑いつつ、煌二は二人のキャラを認識した

「あ、ベッキーはあげないよ? だって私のだからーッ!」

「姫子さんは宮本先生が大好きなんです」

「あ…そういうこと…」

・姫子はベッキーを愛してやまない困った問題児であり、何故か煌二は妙に納得してしまった「よ、転入生、どうだ? 組は? 騒がしいだろ」

「特に姫子はね」

・自分の席にいた玲と都も煌二達の会話に参加

「あ、私は橘玲、こっちは上原都」

「よろしく」

「うん…よろしくね、橘さん、上原さん」

・二人にも挨拶を交わしてる時に…

「ちょっと玲に都！私も忘れないでよね…私は桃瀬くるみ、よろしくね！」

「ごめん…地味過ぎて気づかなかった…」

・都がくるみに地味と言った途端…

「じ…地味？…私…やっぱり地味なのッ！？」

・くるみにとって『地味』はNGワードだったらしく、虚ろな眼でブツブツと呪詛の様に何やら呟き始めた…

「…あの、大丈夫ですか…？」

・煌二は何となくほっとけなく、慰めるが…

「ららるゝ…ららるゝ…良いの、どうせ私、地味だから…フッ…」

・ショックのあまり、悲しい声で変な歌まで歌い出す始末…

（うわぁ…めっちゃ引きずってる…ん？）

「シクシク…シクシク…」

・くるみと一緒に泣く謎のウサギ（らしき生物）がいつの間にか無い膝を抱えながらシクシク泣いていた…

「…何これ？」

「あ、メソウサさんです…」

「メソ？言われてみれば確かに…メソメソしたウサギ…名が体を表し過ぎてしょ…やれやれ…」

・…煌二が弁当を再び食べようとした時…「ん、うまいじゃんこれ…ムシャムシャ…ハッ！？」

・…何故かロボットがいた…某機動戦士に出てくる緑のロボットの様なモノアイのついた四角い顔とボディ、そして桃月学園の女子の制服を着ていた

・正確には着ぐるみだが…そのロボットは顔の部分を開いて両手のマニキュピレーターで器用に煌二の弁当を食べていた…煌二に気づかれ、慌てて顔を閉じて素顔を隠す

「誰だーッ！？…ってか人の弁当…ああ…全部食ったな！？」

「ピコピコ…私ハ、ロボ子！転入生ハ、オマエカ？チナミニ…卵焼き、美味カッター」

・わざわざロボットっぽい口調まで使ってロボ子なる謎な存在が煌二に話し掛ける

「だったらどうする…？一つ二つ摘むならまだしも…全部は無いだろ！このドロボット！」

「フ…悔シカッタラ私ト勝負シロ、転入生！」

「なんだと！？」

「ウリヤー！！！」

・ロボ子が煌二に飛び掛かろうとした時

「やめんか」

「ンガッ！？」

・玲がロボ子の頭を掴み、阻止した

「転入生の弁当を勝手に食った拳句にケンカ売るロボットがいてたまるか…なあ？1-D組・芹沢茜」

「ヒイイイツ！？」

・ゾツとする程の冷笑を浮かべ、手にメキメキと力を入れてロボ子、否、芹沢茜（正体）に怒りをあらわにする玲…

（こ、この人だけは…怒らせてはいけない！！）

・煌二はガタガタ震えながらそう思った…玲はクラス一の秀才にして冷血、一部では『魔女』とまで呼ばれている程恐ろしい人物だったのだ…同時刻

- 校庭の木の上から双眼鏡を使って1-C組のクラスを覗く少女がいた

「さてと、噂の転入生ってのは誰かしら？」

- 彼女の名は綿貫響、桃月学園・1-B組・謀報部所属、最近食べ過ぎてややぽっちゃり体型（それでも痩せてる方）になってるのが悩みの種だったりする

「ん？何やってんのかな？」

- 転入生の調査のため、1-C組を見てみると…

「うがああああ…離せー！？」

「取り押さえろーッ！」

「マッホーッ！！」

- ロボ子をはがいじめにする玲や姫子などの1-C組の面々と、果然と立ち尽くす見慣れない男子生徒…ハッキリいつて途中から見ている者には何がなんだかサッパリだった

「????」

- 響の頭の中は『?』で埋め尽くされ、ただただ疑問だけが残った…
- 騒がしくも楽しい時間はあっという間に終わる…

- 放課後…煌二は一人、ボーツと歩きながら今日一日のことを思い

返す

「桃月学園って騒がしいけど賑やかで面白いところだったな…やっぱ転入して正解だね」それに…」

・桃月学園での新しい出会い…ベッキー・姫子・玲・一条・6号・都などの個性的な担任教師に生徒とも早いうちに打ち解けられた（？）ことが嬉しかった

「あと一人誰かいたような…？ま、気のせいかな」

・某地味っ娘の存在を完全に忘れて何気に失礼な煌二はこれからどうするかを考えた時…

『人ハ…人ノママデ良イ…』

「…なッ！？…嘘…だろ？」

・突如、目の前に現われた…煌二はその姿を見て信じられないという顔つきになる・獣を無理矢理人間にしたかの様な異形の姿…エジプト神話のアヌビス神を模した様な格好のジャッカルに似た怪物が禍々しい鎌を持って煌二にジリジリと近寄る…

「…『アンノウン超越生命体』…だと！？」

・煌二はこの異形が何なのかを知っていた…

『ガアッ！』

「…チィッ！」

・振るわれる鎌を避けながら煌二は腰からベルトの様な者を出現させる…

「もうこの『力』を使うことも無いだろうと思ったけど…仕方ない！」

・煌二は『力』を行使するのに必要な言葉を高々と叫んだ…

「変身ッ！！」

2 - 愉快的仲間達 - (後書き)

2、個性豊かな組や他のクラスのキャラ、メソウサ…ぱにぽにメンバーを交えた一日は終わりましたがついに敵、襲来…次回は煌二が戦う非日常の面になります、お楽しみに！柳雨でした

3 - 神の子 - (前書き)

主人公、ようやく変身、そして予期せぬ事態が知らない場所で起きてたりします

3 - 神の子 -

・煌二が構えると、ベルト『オルタリング』から眩い光が現われ、瞬間、煌二の姿が変化した…

・二対の金の角を生やし昆虫を思わせる様な赤い眼のついた仮面、輝く光あるいは力強い大地を彷彿させる金色の鎧に黒のスーツの戦士…

・その名は『AGITΩ』、始まりにして終わりを意味する光の力を宿した神の子…

『来い…！』

『グガアアアッ！！ア…ギ、トオオ…！！』

・アンノウン・ジャツカルロードは鎌を構えて憎しみのこもった眼で忌むべき存在・アギトを睨みつけ…再び動く

『アギトオオオッ！！』

『くッ！？…だったら！』

・アギトは鎌をかわして、黄色のグランドフォームから炎の如く赤いボディと右腕が特徴のフレイムフォームへ変わり、フレイムセイバーという剣を持つ

『ハアアッ！！』

『ガアアッ！！』

・戦士と異形が振るう剣と鎌が何度も何度もぶつかりあう…

『シャッ！！』

『うわっ！？』

・ジャツカルロードは突然、指輪から鎖を出し、アギトの顔目掛けて鞭の様に振るう…身体をのけ反らせてなんとかこれを避ける…
『ヤバいとこだった！』

・アギトは背後で真っ二つになり、音を立てて倒れる電柱を見てゾツとした…

・鎖はまるで刀の様な切れ味を誇り、もう反応が少し遅かったら真っ二つになっていたのは間違なく自分だっただろう…

『ガウアアアッ！！』

『なんの！！』

・ジャツカルロードは鎖でまた攻撃するが、アギトはそれをかい潜り、一気にふところへと迫り、フレイムセイバーを腹に突き刺す

『ギャオアアアッ！？』

『どうだ…じゃあトドメ！！』

・アギトは頭の角『クロスホーン』を展開…二対の角が六対になる…

・地面には光り輝くアギトの紋章が浮かび上がる…

『ハアアアア…ハッ!!』

『ガギヤアアアアアッ!?!』

・一閃…フレイムセイバーで必殺技『セイバースラッシュ』が放たれ、ジャッカルロードは斬り裂かれ、爆散する

『ふう…』

・アギトは変身を解いて煌二の姿へと戻る…

「しかし…アンノウンがなんているんだ?」

・煌二は疑問に思った…・過去にアギトとして覚醒した自分が『仲間』達と共にアンノウンを倒し続け、彼等の創造主・オーヴァロードとも話をつけ、人類に猶予を与えられ、アンノウンの脅威は去ったはずなのに…

「…解らないことだらけだ…」

・また人間が襲われる…アンノウンは特殊な力を持つ者を恐れ、殺す…アギトである煌二もまた対象だ

「…僕は、戦う…奴等の好きには…」

・ふと、今日出会ったクラスメイト達の顔が浮かぶ…

「…させない、絶対に…！」

- 煌二は険しい顔で拳をギリギリと硬く握り締め、再びアンノウン達と戦う決心をする

「…つと、いけない！もうこんな時間じゃないかッ!?」

- 腕時計を見るともうじき六時前…

「早く帰ろつと！今日の晩ご飯は何にしようかな♪」

- 煌二は気持ちを切り替えて呑気に献立メニューを考えながら一人で暮らしてるアパート（格安のボロ）へと急ぐ…

- この様子をはじめから見ていた者達がいたことに気づかず…
地球から遠く離れた宇宙…そこには未知の宇宙船が浮かんでいた…

「な…何じゃあれは!?!」

「我々のデータベースにもありませんね…一体何者でしょうか？あの生物と戦士は…?」

- 艦内ではどら焼きの様な平べったいフォルムの頭と口元のパイプ、全身真っ黒なボディと三本の力ギ爪がついた手を持った『宇宙人』達…地球の観測とデータ収集を目的としていた彼等はこの不測の事態に困惑していた…

「久々に真面目に地球の観測を試みたらいきなりあんなのが！一体何が起きてる!?!」

「艦長…地球観測が我々の仕事なのに…久々ですか？真面目にやったの…」

「だらしないといつかなんといつか…ハア…」

「仕事しないなら休みをくださいよ、艦長…」

「給料アップ！給料アップ！」

・頭に角を持つ艦長（三倍の速さがあるかは不明だが…）の怠慢ぶりに角無しの部下達が一齐にツッコミをする…一部関係無い発言をした者もいたが…

「やかましいわい！」

「あ、艦長がキレた…」

・艦長は部下達のツッコミに逆切れし、全員を黙らせる

「ハア、ハア…全く、お前はも…」

「すみませんでした、艦長…それでどうします？彼も我々の観測対象にしましょうか？」

「うむ、そうしょうか…頼むぞ、お前達…」

「ハッ！」

「了解！」

「任せてください！」

「給料アップ！給料アップ！」

- 一致団結し、宇宙人達は今日も頑張つて観測する…（一部関係無い発言をした者もいたが…）
- 時同じくして地球…

- 走り去っていく煌二の後ろ姿を見たままその場で立ち尽くす少女が一人…

「…うそ…」

- 信じられない、信じたくないという顔つきで顔を青ざめさせ、全身がうち震える…

- 新しいクラスメイトとして1-C組に、自分の隣りの席について楽しそうに皆と話していた煌二が…

- 異形の怪物に襲われたかと思えば、その異形と同様の人間ではない姿へ変化し、戦っただけでなく、倒してしまった…

- そしてぎこちなくも、皆と楽しく笑いあっていた彼が別人の様な険しい顔つきに…

「渡瀬君…は、人間じゃ…ない…の…？」

- 疑うことを知らない心優しき彼女の心は次第に恐怖に支配されてしまう…

- 少女の名は鈴木さやか

- 親しい者達は皆、彼女のことを『6号』と呼んでいる…

3 - 神の子 - (後書き)

3、ついに変身しました煌二が、アンノウンだからアギトですが
…そのまんま過ぎたらごめんなさい！途中、宇宙人が現われました
がぱにぱにの愛すべき(?) 名脇役故に出しました、次回のテーマ
は『拒絶』…お楽しみに！

4 - 拒絶 -

唐突過ぎる展開にご注意ください、そしてタイトル通り、今回主人公が嫌われてしまいます…

4 - 拒絶 -

- 次の日

「
」

- 口笛を吹きながら煌二は桃月学園に向かう途中、自販機でジュースを買おうと硬貨を投入…ジュースを取り出し、一口飲む

「うへえ！？…生ぬるい…ペツ！」

- ジュースは入れられたばかりか…あまりにぬるく、思わず吐いてしまった…

「ツイてないな…ん？」

- 突如、自販機が『ギギ…』と音を立てて開かれる…中から現われたものは…

「体温ですニヤ」

「
…」

- 大量のジュースを両腕に抱えて冷たいジュースをわざわざ丁寧に体温で生ぬるくするなどという余計な気遣いをしている…丸々太ったネコ（？）らしき生命体があった

「何者？」

「神様ですニヤ」

・煌二が尋ねてみたら…こともあるのに、このネコは持ち前のくどい顔で『神』などとふざけた名乗りを魅惑の低音ボイスで言い放つ

「…」

「ウニヤ!？」

・煌二は無言で自販機を閉め直し、後ろを振り返りもせずに桃月学園へ行く…

(何も見てない!何も見てない!僕は何も見てない!絶対にだ!)

「…つれないのね」

・自販機の中から悲しい声が虚しく響いた…・桃月学園・1・C組

「あ、橘さん、上原さん、一条さん、おはよう!」

「よ、おはよう」

「おはよう、元気ね」

「はい、おはようございます」

・煌二は自分の席につきながら玲・都・一条に挨拶を交わす

「あれ…私は…?」

・持ち前の地味さから存在を忘れられるくるみ…

「そついえば片桐さんと6号さんは？」

「ん？なんだ？姫子とはかく、6号が遅刻なんて珍しいな…」

・『妙だな』と玲が思った時

「みんな席につけ、朝のHRはじめるぞ」

「あ…宮本先生だ…」

・ベッキーが教室に到着したため、各自、会話をやめて自分の席につく

「ん？姫子と6号はまだなのか…？全く…」

・ベッキーは軽く全体を見渡し、面倒くさそうな顔をしながらHRをはじめようとした時…

「おつまたせー！！姫子ちゃん登場ー」

「遅いぞ、このバカ！」

「ベッキーごめーん！」

「ギャー！やめろ、はなせ！せんせえだぞ！？」

・遅刻したにも関わらず、満面の笑みを浮かべてベッキーに熱い抱擁をする姫子

「すごいな…片桐さん…色んな意味で…」

「まあ毎日だからな…」

・呆気にとられる煌二とその様子を呆れ顔で見る玲…

「一応聞くが…遅れた理由はなんだ？」

「よくぞ聞いてくれた！」

・姫子は遅刻の理由をベッキーに語った…

・姫子劇場（…つまり、姫子の記憶とイメージによる遅刻理由の回想シーンが始まったのだ）

「やつばーい！遅刻、遅刻ー！！」

・今から約20分前…いつもの通学路を疾走していた時だった…（アホの姫子の記憶のため、美化された少女漫画チックな姿）

『ウガー』

「わー」

「至急応援を頼みます…ギャー」

・警官達（適当な落書きみたいな姿）が拳銃片手にジャガーな怪物（デフォルメチックな姿）と戦っていた、警官達は健闘虚しく次々倒される

『ガオー』

「マホー!？」

- ジャガーな怪物は姫子に襲いかかる…その時だった

『ハッ!!!』

『ウボー』

- 突如、割って入り、ジャガーを殴り飛ばし、姫子の危機を救ったのは…

「ロボット?」

- 重厚な装甲に包まれた、ロボットの様な姿をした青い人だったという(何故かかなり美化されたカッコいいフォルム)

『大丈夫ですか?お嬢さん…』

「は…はい…あなたは?」

- 紳士的な素敵ボイスで優しい気遣いをするロボットな人

『私は大丈夫だから早くお逃げなさい、テリヤアッ!!』

『グバー』

「は…ハイ!」

・ロボットな人がグレネードランチャーをジャガーな怪物へブツ放し、姫子を逃がす…

・姫子劇場終了

「…って、ことがあったんだ」

・姫子が話し終わると皆、複雑な表情を浮かべる…特に…

（ちょ…！？まさか…）

・煌二には心当たりがあるらしく、汗だくになる…

「ダメカナ」

・姫子は笑顔でベッキーに言うが

「ダメダヨ」

・笑顔で却下された

「ちえーケチー、ブー」

「文句言っで無いでサッサと席つけー！」

・姫子は文句を言いながら席につく

「すみません…遅れました…」

・そこでちょうど、続いて遅れた6号がやって来る…

「6号！お前どうしたんだ？心配したぞ？」

「ベッキー！？私は心配してくれないのー！」

「やかましい！6号、お前も何か理由あるのか？」

・姫子を黙らせ、6号に遅刻理由を尋ねるベッキー

「あの…えと…ごめんなさい…昨日の夜に…よく眠れなくて…寝坊しました…」

・6号は建前でそう言うが本心は…

「？」

・煌二を横目でチラツと見ながら昨日のことを思い出す…

・異形の怪物、姿が変わった煌二、怪物を倒した煌二の険しい顔…
全てが恐ろしい…

・これが6号の脳裏に未だに焼きついて離れず…拳げ句の果てには
夢にまで現われ、寝不足になる程だった

・しかし、こんな事をおくびにも出せなかった…ましてや『本人』
がいる教室の中で…

「まあ…良いや、席つけ」

「はい…」

・6号はトボトボ歩きながら席につく…

「どうしたの6号さん…？大丈夫？顔色…悪いよ…」

「ひゃっ！？な…なんでも…無いです…」

・自分の隣りの席の煌二が話し掛けてきたため、6号はますます顔色が悪くなり、挙動不振になった

・朝のHR以来、二人の間に溝が出来た…

「6号さん…あれ…？」

「あ…う…」

・煌二が話し掛けても、6号は何故か避けるように離れる…それも怯えた眼で煌二を見ながら…

・こんなことが昼休みにまで続いたため、1-C組メンバーは不信に思った

「渡瀬、お前、6号に何かしたのか？」

「え…？」

・最初に切り出したのは玲だった

「あの娘が人を避けるなんてこと、滅多に無いのよ？何かあったんじゃない？」

・くるみも話に参加する…

「あ、いたんだ？くるみ…そうよ、あの娘は優しいよいだから…こんなことは今まで無かったのよ？」

「ガーン!!」

・くるみも、くるみの存在を忘れてる都も6号の人柄をよく知ってるため、聞かずにはいられなかった

「と、言われても…僕は転入したばかりで…6号さんのことはよく知らないし…」

・困惑した顔で煌二は彼女達の話に応えてた時…

「あ、6号さん…あの…」

「い、嫌アツ!!」

「「「「!?!?!」」」」

「…え？」

・信じられない光景だった、教室中に『パンッ』と、渴いた音が響き渡る…

- 6号が声を掛けてきた煌二の頬を叩いた…おとなしい彼女がこんな荒っぽいことをしたため驚く一同…

「6号…さん…？」

「来ないで！来ないでください！！嫌！嫌アツ！」

「6号！？」

「6号さん！！！」

「ちょっと…どういうことなの！？」

- 6号は涙を流し、拒絶の意志を見せながら、教室から飛び出しました

「な…なんで…？」

- 煌二にも何が起きたかサッパリだった…

- 何故こうなってしまったのか…？それは6号しか解らないことだった…

4 - 拒絶 -

5、いきなり神様（！？）なんてあやしいキャラが出ましたが彼もまた宇宙人と同じくぽにぽにの名脇役。ちなみにアニメ版での声は仮面ライダー幽汽 & amp; ゴーストイマジンだったりします。…次回のキーパーソンは姫子劇場に出てた『青いロボットな人』です、お楽しみに！

5 - 蒼き機兵 - (前書き)

不定期とはいえ放置し過ぎました……しばらくシリアスが続きます

5 - 蒼き機兵 -

「6号さん…。」

・煌二は叩かれた頬を押さえながら、ただただ6号が走り去った方向を見つめていた…。悲しい顔で…。

「席につけ。授業始めるぞ。」

・いつものけだるい声で何も知らないベッキーが教室に入る…。

「ベ…ベッキー…！大変だよ…！」

「どうした姫子？またアホ毛でも抜けたか？」

「ち、違っつてば！？そんなしょっちゅう抜けないよ！」

・ベッキーの見当違いな言葉に姫子は慌てふためく…。

「そうじゃないんだよ…。実は…6号と渡瀬が…。」

・姫子に任せると埒があかなくなりそうなので玲が代わって、事の経緯を話す。

「…大体解った。みんな、今日は自習だ！渡瀬、お前は私と研究室に來い…。話がある。」

「う…、は、はい…。」

・煌二は心底後悔に満ちた表情でベッキーについていく…。

「渡瀬君…。」

「なんでこうなったんだろ…?」

「…そういえば、6号は…?」

「「あ!?!」」

・6号がいないことを玲が気づくと、都とくるみは顔を見合わせて驚いた。

「あ、あのー、ボクに何か出来ませんでしょうか?」

・うち震えた小声でメソウサがみんなに意見するが…。

「ウサギに何も期待なんてしてないって。」

「えー!?! ひ、ひどい…シクシク…。」

・玲の冷たい一言にメソウサは無い膝抱えてシクシク泣き出した…。

・一方、6号はというと、学校を飛び出してしまい、行くあてもなく、外をさまよっていた…。

「どうしよう…。」

・いくら煌二が人間以外の何かでも、クラスの皆が見ている前で叩くなんてどうかしている…それに彼は自分を心配して声をかけてくれただけではないか?

- だが6号にはあの化け物と戦う時の姿の煌二の恐ろしいまでの強さに恐怖を抱いていた…。

- 果たして、普段の煌二とあの仮面を纏った人外の煌二…どちらが本当の顔なのか…考えていた時だった。

『ハアアアア…』

「え…!？」

- 6号はその存在と気づいて驚愕し、物陰に隠れる…。

- 姿形は昨日の怪物とは違うが…それでも6号には充分に恐怖の対象だ。

- 触手のついた薄い膜状のものに覆われた顔はクラゲを彷彿し、フランケンシュタインの様にツギハギにした身体を持っていた。

- 6号には知らないことだが、この異形もまた、アンノウンと呼ばれる怪物の一種、ハイドロゾアロードだった。

『ギエエエエツ…!』

「ギアアアアアツ…!」

- ハイドロゾアロードは近くにいた男性に向けて稲妻を落とし、あつという間に感電死させてしまった。

「キャアアアアア!？」

『!?!』

- 6号は思わず叫んでしまった。ハイドロゾアロードもそれに気づいた。殺人を見られたためか、やむを得ず、口封じのために新たな矛先として6号を選んだ。

『グオオオオツ!!』

『嫌!来ないで!!』

- 迫るハイドロゾアロードから逃げる6号、だが相手も逃がすわけにはいかない。落雷を呼び寄せ6号の逃走を妨害する。

『キヤー!!?!』

- 6号は落雷を恐れて立ち止まってしまう。

『コハアアア…。』

『ああ…あああ…。』

- もはやこれまでと思われた時だった…。『そうはさせんツ!!』

『ギャツ!!?!』

- 突如、横から割って入る様にハイドロゾアロードを殴り飛ばす乱入者。

(あ…あれって…姫子さんが話していた…。)

- 6号は朝の姫子のお話を思い出していた…。

- 赤い眼、蒼き装甲を身に纏う、ロボット機兵…肩に書かれた銘は『G3 - X』、姫子を救ったそれが今度は自分を救ってくれた…。

『危ないから君は下がっててくれ…行くぞ！そらそらッ！！』

『アアアアアア…！？』

- G3 - Xは6号を下がらせると、自動小銃『スコピオン』による射撃で牽制、さらに、腕にアンカーユニット『アンタレス』を着して発射、ハイドロゾアロードをワイヤーでがんじがらめにしてしまう。

『アガアアアア！？』

『暴れたって無駄さ…お前でもそのワイヤーは切れまい！トドメだ…遠慮なく持ってけッ！』

- G3 - Xはスコピオンにグレネードユニットを装着させたグレネードランチャー型の武器『サラマンダー』の弾丸を三発も発射し、命中させる。

『ホギヤアアアア！？』

- ハイドロゾアロードは何も出来ずにそのまま爆散してしまう…。

『ミッションコンプリート任務完了…！こちら、真佐木、市民を一名、救助・保護し、アンノウンを始末した。』

- G3 - Xは無線でどこかへ連絡、仮面を外す…。

「ふう…やれやれ、さて、お嬢さん、大丈夫でしたか？」

「え…！？に、人間…？」

- 6号はG3 - Xの素顔を見て驚いた…その正体は人間…眼鏡をかけ、丁寧で、紳士的な言葉遣いの柔和な表情を浮かべる男性だった。
「失礼…私は真佐木正義まさき まさよしと言う者です。あ、私がG3 - X…さっきの蒼いロボットなのは御内密に」一応、警察組織の機密事項なので」

「あ…は、はい、助けにありがとうございましたありがとうございます。私は…鈴木さやか、6号と呼ばれてます。」

- 6号は戸惑いながらも正義にお礼をする。

「6号さん？変わったあだ名だね。ん…？その制服、桃月学園だね…この時間ならまだ学校はあるはずだけど？」

- 正義が学生である6号がこんな時間に外にいることを不思議に思う…。

（あ…。）

- ふと、6号は自分が叩いた時の悲しげな表情を浮かべる煌二の顔を思い出す…。

「…真佐木さん。私、ある人を傷つけて…逃げてしまったんです。」

「…？」

・正義は神妙な顔つきで6号の話に聞き入る…。

「その人も…さっきの怪物みたいなのと戦って…でも、その人…人間じゃなかったんです。金色の仮面をつけた何かに変わって…。」

（ん？まさか…。）

・正義は6号の話す人物に心当たりがあるようだ。

「私、怖いんです！怖かった…あんなにも優しそうなあの人が怪物を倒すような何かに…もうどっちが本当のあの人が…私には解らないッ…！」

・気づけば6号は泣きながら叫んでいた。

「…大丈夫だよ、6号さん。」

「え…？」

「『彼』は…渡瀬煌二君は人間だ。ただちょっと特別な力があるだけで…君達と同じ人間だよ。」

「！？」

・6号は自分が名前を言っていないのに、正義が煌二の名を出した事に激しく動揺した。「彼から直接聞いた事だが…煌二君も悩んだよ…ある日突然あの力に目覚めて、周りから拒まれて、アンノウン…」

君が言う怪物にも狙われ続けて、一時は我々も彼を危険視したものだ……。」

・6号は今度は正義の話に聞き入っていた……。

「それでも、明るいんだよ。眩しいくらいに……。」

「え……？」

「辛い運命を背負ってるのに……それから逃げずに正面から立ち向かってるかのように明るい笑顔を見せて、誰かのために戦ってる……煌二君はそういう人間なんだ。」

・懐かしむように話す正義の言葉に6号はショックを受けた。

「私、私……渡瀬君に謝らなきゃ……真佐木さん。ありがとうございますましたー!!」

「ん、気をつけて……彼によろしく伝えて。」

「はい!!」

・6号は涙を拭い、笑顔で正義に礼をする。

「ついでに送って行こう、こっちの方が速い。」

「ありがとう!」

・正義は自分が乗っていたGトレーラーを指して6号を乗せて桃月学園へ戻る……。

5 - 蒼き機兵 - (後書き)

メソウサの扱いがひどいのは原作仕様：新キャラの真佐木さんですが、彼こそかつて煌二と共にアンノウンと戦ってきた戦友なのです。今回は煌二とベッキーがお話し、やはりシリアスです。

6 - 新たな使徒 - (前書き)

今回の話で本作オリジナルのアンノウンが出てきます。

6 - 新たな使徒 -

「渡瀬、本当に6号とは何も無かったんだよね？」

「…はい。」

- 現在、煌二はベッキーの研究室（異様に散らかってたりするが。）で、6号とのトラブルについて言及されていた。

「…自分でも、解りません…。」

「そうか…よく解らないけど6号はきつと何か誤解してるんだろな…マズいものでも見たように。」

「！？」

- 煌二は昨日のことを思い出す…。アンノウンと戦うため、アギトに变身、そして勝利…。

- それを全て6号が見てたとしたら…？

「あ…あああ…。」

- 全てにつじつまが合う…。あの怯え様、自分を拒むかの様なよそよそしい態度、そして平手打ち。

「渡瀬…？顔色悪いぞ？」

「…先生…オレは…。」

・煌二が言葉を紡ぐ…。

・一方

「何話してるのかしら？」

「説教されてるのかな？」

・研究室のドアで聞き耳を立てる都と玲。

「進路相談でしょうか？」

「いや、それはないよ一条さん！」

・一条の的外れな発言にくるみが突っ込む。

「ま、まさか!!」

・姫子があらぬ想像をする…。・以下、姫子の妄想。

「先生…オレ…初めて会った時から…!!」

・煌二が突如、何やら叫んでベツキーににじり寄る…。

「え…渡瀬！？よせ！やめろ！せんせえだぞ!!」

「…宮本先生!!」

「…」怖い、やめろお…。」

「そして嫌がるベツキーに…。」

「マホーツ！？そんなのダメーッ！！ベツキーはまだチビッコなのにッ！」

「ば…バカ、姫子！よせ！」

「妄想を強制的に終了させて、研究室に突入する姫子。」

「オレは学校をやめ…って、何だぁッ！？」

「姫子！な、なんで！？」

「二人はいきなり『パンツ！』と開かれたドアから現われた姫子に驚いた。」

「ベツキー！！ダメー！渡瀬君とそんな関係になっちゃー！！」

「「…はい？」」

「『？』を頭上に旋回させる二人。」

「アホか、ごめんベツキー、話の邪魔して…。」

「渡瀬君もごめんね…。」

「玲！くるみ！？それに一条に都まで…自習はどうしたー！？」

「姫子に代わって謝る玲とくるみだった、自習はサボってきたようだ。」

「あの…皆！聞いて欲しいんだ…。」

・煌二は語調を強めて全員に今、自分が思ってることを全て話した。

「…オレは、桃月学園を…学校をやめる。いや…やめきやいけないんだ。皆のために…。」

「「「「「！？」」「」「」「」

・その場にいた全員が信じられないという顔になる。

「お、お前！いくら6号に嫌われたからって…。」

「良いんです…。」

・煌二は昔のことと、今の6号のことを脳裏によぎらせた…。

『渡瀬…お前…ヒッ…来るな…！』

『か…帰れ！もうお前なんか知らん…！』

『悪いが…君は排除させてもらおう…人類のために…！』

『来ないでッ…！』『誰かに拒まれる事や、一人になるのは、慣れるから…。』

・苦笑する様に言い放つ。とてもさびしい表情で…。そして煌二はそのまま出て行こうとした時。

「渡瀬ッ！！そんなに軽々しくやめるなんて言っなッ！」

「…宮本先生？」

「ふざけるな…何が皆のためにやめるだ…この臆病者ッ！！」

「な…！！」

・ベッキーは子供とは到底思えない激しい剣幕とむき出しの感情で煌二に容赦無くストレートに言い放つ。

「ベッキーの言うとおりだな…6号はどうするんだ？このまま誤解を解かないまま逃げるのか？」

「た…橘さん…。」

・普段は何事もクールに澄ませる玲も僅かに怒りを見せる。

「でも…。」

「もう！理由は解らないけど…勝手に『一人』とか言わないッ！私達もう同じ組の仲間じゃない！？」

「上原さん…。」

・都も話に加わる。

「それに…。」

「渡瀬君やめるの！？それダメー！！」

くるみの言葉を遮る様な大声で姫子が叫ぶ。

「…片桐さんまで。」

「わ…私は!？」

くるみ一人がハブられてしまう、しかしこれは仕様なので仕方ない、そして地味だからだ。

「1-C組メンバーの思わぬ言葉に煌二は戸惑った。『真実』を知ってなおも解り合えた人達も何人かいる…。」

しかし、大半は自分を恐れ、離れる者が多かった。果たしてC組の皆は前者か、後者か…それを考えていた時だった。

「…。」

「…一条さん?どうしたの?」

「アレです。」

「!？」

煌二は窓から『それ』を見て本能が『危険』を告げた。

天空に奇怪な魔法陣の様なものが見え、それがまるでこちらを狙ってる様に浮かんでいた…。

「…皆!伏せろツ!!」

「え…？キャアアアッ！？」

- 全員が煌二の言葉を聞いた途端、魔法陣から高速で水の弾丸が集
中豪雨…あるいはマシンガンの様に発射される。

- 水弾が窓ガラスを全てブチ破ってしまう、C組メンバーは悲鳴を
上げてその場に伏せる。

（まさかアンノウン！？学校にまで現れるなんて…！！）

- 攻撃がやがて止み、煌二は外を覗き込む。

「やはりか！」

- 外には悲鳴を上げて逃げ惑う生徒達…それに混じって、一人の『
異形』が立っていた。- 布を分厚く巻いた両腕、金色の錫杖、司祭
を思わせる様な服装にカエルの様な醜悪な顔…。

『見つけましたよ…アギト。』

- やはり狙いはアギト…煌二だった。アンノウン・フロッグロード
はこの騒動を起こしたにも関わらず、穏やかな口調で言う。

「な…なんだ、あの化け物は…！」

「カエルさんかな？」

- C組一同は初めて見るアンノウンの姿に驚愕する…。姫子以外は。

『アギト…いるのは解ります。今のは警告です。貴方が出てくれば…他の方々の安全は保障してあげますよ?』

・フロッグロードはベッキーの研究室のある方向一点のみを見つめている。

(マズい…奴は本気かもしれない、今オレが出ないと…けど…!)

・煌二はベッキー・姫子・玲・都・一条の顔を一人一人見ながら迷っていた…。緊急事態で頭が回らなかったため約一名だけは見なかったが…。

・今自分が出て行って戦えば間違なく、桃月学園を離れざるを得ないだろう…。

(何を迷ってるんだ…もう慣れたことじゃないか!)

・煌二は研究室から抜け出して外へ出てフロッグロードと対峙する。

「な!? 渡瀬ッ!」

・いきなりの煌二の行動にベッキーは慌てるがもう遅かった…。

『ほづ…よく出てくれましたね? アギト。』

「狙いはオレだけだろ…皆を巻き込むな…!!」

・今すぐにもコイツを殴りたい…そんな激しい感情の昂りを抑えながらもフロッグロードと話す煌二。

『ご安心を…あれはほんの冗談でやったことです。ですが…。』

「…がふっ！？」

・フロッグロードは自分の武器である『天命の錫杖』で煌二の顔を殴打…煌二は地面に倒れる。

『貴方は殺します…これは冗談ではありませんよ？忌むべき存在・アギト。』

「かは…あがッ！？ぐああッ！！！」

・倒れる煌二に容赦無い突きの嵐が襲う…。

『人間が神に近づく？愚かしい…異端は排除せねばなりません。特にアギトは…。』

・フロッグロードの錫杖が煌二の頭目掛けて振るわれる…。

「渡瀬ーッ！！！」

「いやあああッ！！！」

「やめろー！！！」

「マホ…。」

・1・C組の皆の声が虚しく響き渡った時だった…。『む？グオッ！？』

・一台の車が乱入、フロッグロードをはね飛ばす。

「あ…あれは!？」

・それはG3-X専用のGトレーラーだった。

『大丈夫か!煌二君!？』

「真佐木さんッ!！」

・Gトレーラーから、G3-Xを纏った正義が現れる。そしてもう一人…。

「渡瀬君!ッ!！」

「え…6号…さん？」

・まさかの予想外、6号まで登場したのだ。何がどうなっているのか…。煌二にはサッパリだった。

6 - 新たな使徒 - (後書き)

#6、シリアスになっているか否か？なつて無かつたらすみません。
本作オリジナルのアンノウンデータを軽く紹介します。

フロッグロード「ランキュラス・ディクタトル（ラテン語で『独裁官のカエル』）、武器は『天命の錫杖』、能力はカエルだからか、水を操ること

こんな感じです。

次回、G3とカエルが激突、お楽しみに。柳雨でした。

7・絶望と希望・（前書き）

書いてる内に仮面ライダーというよりも、某海賊漫画に近いかと
いう展開になってしまいました… 激戦開幕

7・絶望と希望・

「6号さん、なんで真佐木さんと!?!」

・自分の知り合いと共にいる6号に対して疑問を抱く煌二。

「あ…あの、それは後で必ず話します! 渡瀬君にまず言いたいことが…」

『余所見とは余裕ですね、アギト!』

・6号の言葉を遮る様にフロッグロードは天命の錫杖を振るって煌二を殴打しようとするが。

『やらせはせんよ!』

『!?!』

・G3・Xは電磁コンバットナイフ『ユニコーン』で天命の錫杖を受け止める。

『君はその娘を避難させるんだ! 私の部下が避難誘導している…それについて行け!』

・周りを見ると警官達が大勢の生徒や教師を誘導していた。桃月学園の校庭で残ってるのは煌二と6号くらいだ。

「待つてください! まだ中にC組の…僕のクラスの人達が学校に!」

・煌二の言つとおり、まだベッキー達が校内に残っていたのだ。

『なに！？…あそこか！』

・G3は研究室のあるあたりを見上げる。

「なんだあれ？」

「姫子が言つてた青いロボット？それに6号さんまで！」

「ほらほら！私の言つたとおりでしょー？」

『あらら！？』

・どうやらG3というサプライズに興奮している様だ。その間の抜けた歓声を聞いたG3は思わずコケそうになった。

『君達！早く校内から出るんだ！！ここは危険…うわッ！？』

『どこを見てるのです？ハアッ！！』

・フロッグロードはパワーを込めて天命の錫杖でG3の手元を突き、ユニコーンを弾き飛ばした。

『は！？貴様…！！』

『アギトでもないのに邪魔をするとは…致仕方ありませんね。ならば！』

・フロッグロードは天命の錫杖を振って円を描き、G3の足元に魔

法陣を出現させる。

『何を…うぐあっ!?!』

・魔法陣から高熱の間欠泉が勢い良く発生、G3は間欠泉に上空高く打ち上げられ、地面に頭から落下してしまう。

『カハッ!』

「真佐木さん…!」

「そんなッ…!」

・G3の敗北に全員が衝撃を受ける。『…手加減はしました。さて…次はあなたですね…アギト!』

・フロッグロードは天命の錫杖で円を描くと、天空に魔法陣を出現させ、無数の水弾を発射、狙いは煌二…。

(6号さんッ…!)

・このままでは彼女も確実に巻き込まれる…煌二は6号を守る、ただそれだけを考えながら、瞬時に『構え』を取り、オルタリングを出さざるを得なかった…。

「変身ッ…!」

「え…!?!」

「何だ…眩しッ…!」

「何が起きたんだッ!？」

- オルタリングから発せられる眩い光が周辺を照らし、ベッキー達は思わず目を背ける…。

『6号さんッ!ぐああああーッ!』

- 煌二はアギトに変身した後、すぐさま6号の前に両腕を広げながら立ち、自らの肉体を彼女を水弾から守る盾とする。

「…渡瀬君…やっぱり…あなたは…。」

- 6号はアギトとなつた煌二の姿を見て疑念は確信に変わり、驚いた。

- これにはベッキー達も同様である。「あれが…渡瀬、なのか?」

- ベッキーは信じられないものを見た様な顔つきになる。

(何なんだ…あの姿ッ!あいつ、もしかしてあの姿を見られなくなつたから…私達を巻き込みたくなかつたから…学校をやめる気だつたのか?)

- 玲はアギトを見て彼が考えてることを理解した。

「嘘…有り得ない…何なのよ、一体…?何が起きてるのよー!」

- 現実主義者である都はこの非現実な光景を見て叫ぶ。

リアリスト

「人間じゃない…の…?」

・くるみも都と同じく激しく動揺する…。

「みんな…やめてよ！そんなこと言つの！渡瀬君は傷だらけなんだよ！？6号さんを守って！！」

「姫子…。」

・姫子はバカだがアギトの、煌二の行動の意味が痛い程に解った…。

（どうか御無事で…。）

・普段寡黙な一条でさえも心の中で無事を祈った。

『ゴメン…よ…隠し事で、君達を巻き込んで…。ガフッ！』

「渡瀬君！あなた…血が…血がいっぱい…！」

・守られた6号はアギトに手で触れる…口や全身から血を溢れさせ、それでも尚、アギトは広げた両腕を下ろさない…。

『ハハ…フハハハハッ！！ついに、ついにその姿を見せたかッ！？アギトオッ！！』

・先程までの丁寧な口調とは違って変わって、狂気に満ちた笑い声を上げるフロッグロード。

『貴様は本当に愚かだッ！愚か過ぎて笑えてくるぞ…クハハハハハッ！！なんだその無様な姿はッ！？貴様が人間を守る必要など無かるうにッ！？』

・嘲笑うかの様な口振りにアギトは怒り混りに、息を切らしながら言い返す。

『うる…さい…！ハア、ハア…オレは…ただの、人間、だ！！守る…！この人達を…絶対にだッ！』

『減らず口を…見苦しい、ヌンッ…！』

『な…ンゲッ…！ンウウ…！？』

・フロッグロードは両腕に巻かれた布を伸ばしてアギトの顔と身体に巻きつかせ、宙吊りにしてしまう。

『ンゲ…ンンン…！！』

・アギトは必死に拘束を解こうと足掻くが、ビクともせず、オマケに顔全体をピッタリ覆われているため、呼吸すらままならない…。

『見ろ！愚か者に守られている人間共よ…この者のどこが人間だッ！？』

・フロッグロードは拘束されたアギトをベッキー達の方へとよく見える様に突きつける。

「渡瀬…。」

・人間とはかけ離れた姿をしたアギトの金色の身体は血と傷で汚れ、拘束されミイラの様な姿…それをC組の皆が見ている。これだけで心が砕けそうになる。

（頼む…見ないでくれ…！今のオレを…。）

・しかしアギトの心を完全に砕くかのような残酷な言葉をフロツグロードはためらいもなく放った。

『貴様に！人間としての居場所など何処にも無い…そう！貴様はただ独り、誰から必要とされず！！惨めに私の手にかけて死ぬのだからアツ！？』

（こい、つ！こいつだけは…！！クソツ！クソツ！チクシヨオオオ…！）

・これ以上…こいつの暴言を許してはおけない、早くこの手で殴って黙らせたい…しかし、願っても虚しく、拘束されているため、殴るための手すら動いてくれず、呼吸も意識も段々危なくなる…。絶望に打ちひしがれそうになりかけた時。

「…せよ…。お前…。」

（…？）

『はい…？』

・ベッキーは教師、天才とはいえ、幼い子供…だが理不尽な悪を決して許さない、そして何より。

「渡瀬を放せよッ！お前ッ！！そいつは、私の…大事な生徒だアアッ！」

・大切な生徒のためなら、何者も恐れない。

（宮本…先生！？）

『何を…言っているのです？』

・ベッキーの予想外の感情むき出しの絶叫はさらに続く。

「聞けっ！渡瀬！！姿がなんだ！化け物だからどうした！？お前は
お前だアッ！」

（先、生…。）

「私の生徒に謝れ…このカエル野郎！お前の方がよっぽど醜いよ。
姿も、心もッ！！」

『だ、黙って、き、聞いておれば…小娘ごときがああああ…！！』

・フロッグロードの怒りは頂点に達し、矛先をベッキー達に向けよ
うとしたが…。

『ウオオオオオオッ！！』

『何…！？ガハアッ！！』

・いつの間にか復活したG3が『デストロイヤー』と呼ばれる振動
ブレードを腕に装着、間合いを詰め、アギトを拘束していた布を断
ち斬る。

『…グハッ！？ゲホッ…ゲホッ！！』

・突然解放されて、急な呼吸をしたからか、むせてしまっが、これでアギトの危機はしのげた。

『大丈夫か！？』

『真佐…木、さん。』

・G3はアギトに駆け寄ると、手を差し延べて肩を貸す。

『聞こえるかい？…君をこんなに思ってる人達の声を…。』

『…え？』

・いつの間にか、それは聞こえた…。

「立てッ！負けるなッ！私の生徒があんな奴に負けるなんて…許さないからな！！」

『宮本先生…。』

「渡瀬、大丈夫だ。私達は…もうC組の仲間だろ？」

『橘さん…。』

「その姿、カッコいいよッ！…ヒーローみたいでー！」

『片桐さん…。』

「もう！しっかりしなさい！…勝つのよ…必ず…。」

『上原さん……。』

「今度バイト先の喫茶店でおくるからッ！立って！」

『桃瀬さん……。』

「御武運を……。」

『一条さん……。』

「そして……。」煌二君！！私の誤解で傷つけて……ごめんなさい！」

『6号さん……。』

「けどあなたは、それでも、私を許してくれますか……？」

・6号は身体を震えながら涙声で声を張り上げて、せいっぱい謝まった、返事は勿論。

『許すも何も……オレは怒ってもいないさ。だから、さ……泣くのはやめてよ。あいつは倒す……絶対にだッ……！』

・アギトはボロボロの身体で尚も立ち上がり、フロッグロードを指す。

『……この虫けら共がああああー！！殺す！まとめて殺してやるぞ……アギト共ッ……！』

・完全にブチ切れたフロッグロードは殺意を全開にし、無数の魔法陣を出現させる。

『死ねッ！！』

『な…！？』

- 魔法陣の一つ一つから大量の水が噴き出し、やがてそれらが大規模な『津波』と化して桃月学園を飲み込もうとする…。

- 勢いも強く、このままでは確実に…。

『させるかあああああッ！！』

7・絶望と希望・（後書き）

7…オリジナルアンソウンのカエルをかなりの悪にしたらいつの間にやら今までにない激しい展開に…絶叫し過ぎだろ！アギトかなりボロボロですがG3共々、まだ戦えます、次回、オリジナルでアギトに新たな力が備わります

8 - 飛翔 - (前書き)

今回の話でアギトの新しい力が発動します、そして若干短めです

8 - 飛翔 -

『ウオオオオオッ!!』

『渡瀬君!?!』

『む、無茶だ!戻れーッ!!』

- 6号やG3が止めるのも聞かずに、迫り来る津波を前にアギトはためらいもなく突っ込んでいく。

『バカな…頭は確かですかッ!?!』

- フロッグロードはアギトの予想外の行動に驚愕した。

『やれる!今のオレなら…!!』

- 津波がアギトを飲み込まんと容赦無く迫ろうとした時。オルタリングから変身する時以上に眩い光が放たれ…晴れた瞬間にアギトに異変が起きた。

『なにイイイイ!?!バカな…あの姿は…。神…。』

- フロッグロードが驚愕するのも無理は無かった。- アギトの背中には、まさに『神』を思わせるかの様な放ちながら輝く、八枚の神々しい『翼』が生えていたからだ。

『ハアッ!!』

- アギトは翼を使って飛翔、さらに翼を羽ばたかせて、突風を起こ

し、津波にぶつけると、津波の威力は弱まり、校庭を僅かに濡らす程度に止どまった。

『あ、あれを止めたのか…!?!』

- G3はアギトの信じられない力を目の当たりにした。

「綺麗…。まるで天使みたい…。」

- 全員がアギトの背中 of 『神の翼』にすっかり魅せられ、フロッグロードへの恐怖感はずっかり消えていた。

『次はお前だ。』

『な…グオアッ!?!』

- アギトは『神の翼』を羽ばたかせ、フロッグロードへ急降下しながらパンチを繰り出し、顔を思い切り殴る…フロッグロードは『ズザザッ』と音を立てながら地を滑り…口から鮮血が噴水の様に吹き出る。

『ブ…ゲホッ…ゲホッ!ブガ…!?!』

『まだだ。』

- アギトの反撃のラッシュは止まらなかった。

『フッ!!ハッ!!オラアッ!』

『ガハッ!ヒギイ!?!や…やめ、ウギヤアアッ!?!』

・顔を中心に連続で殴りつける…単純ながらもその威力は充分にフロッグロードへ突き刺さった。

『ま…待ってください！アギトよ…私を許せない気持ちは解りますが、た…助け…！！』

『お前が…許せないって？違うな…。』『な、に…？』

・懇願するフロッグロードに対し、一呼吸置いてから、アギトはこう言った…。

『お前は「許せない」んじゃない…「許さない」んだ…！』

『ハアツ！？』

・これに対してC組の面々は…。

「え…ええと、ねえベッキー、どういうこと？」

「『許せない』は相手を許してくれる可能性があって、『許さない』は絶対に許してくれない…って、ことだろ。」

「マホー？なんとなく解った気がする…。」

「つまり…あいつキレてるのか…！」

・姫子の質問にベッキーが答えることで、玲は煌二の怒りがようやく解った様だ。

『行くぞ…』

『ヒッ…ヒイイイッ！く、来るな、来るなアアッ！？』

- 悪足掻きなのか、フロッグロードは複数の魔法陣を展開し、水弾による一斉射撃を開始するが…。

『無駄だ。』

- 『神の翼』の起こす突風でかき消されてしまう。当たったものもあるがアギトにはビクともしなかった。

『水遊びはそれでoshiまいか？』

- 淡々と、しかし、静かなる怒りがこもったアギトの一言一言がフロッグロードに恐怖とプレッシャーを与える…。

『…トドメだ。』

- アギトはクロスホーンを展開、アギトの紋章が現われ、『神の翼』はそのますます輝きを強める。

『ハアッ！…！』

- アギトが手をフロッグロードへとかざした瞬間…。『な！？うわああああッ！…！』

- 竜巻が発生し、フロッグロードはその中に閉じ込められてしまう…。

『ハアアアッ…!』

・アギトは空を舞いながら、両足に力をこめ、それを一気に放つ。

『ハッ!!!』

『ギャ…!?!』

・アギトのキックでフロッグロードは貫ぬかれ、爆発を起こす…新たな必殺技『トルネードブレイク』で見事に打ち倒されたのだ。

『…。』

「渡瀬!!」

・アギトの『神の翼』が消失し、さらには変身まで解けてしまい、煌二は糸が切れたかの様に崩れ落ちる…。

『煌二君ッ!?!』

・倒れる煌二はG3によって受け止められる。

『救護班!急いで来てくれッ!!早くッ!!』

「渡瀬君!!」

・G3は無線で救護班を要請、6号は煌二へと駆け寄る…。

『大丈夫…どうやら気を失ってるだけだよ?』

「良かった…。」

・G3の一言で6号は安堵し、力無く座り込む…。

「おい、渡瀬ーッ！！6号ーッ！！」

・学校からC組のメンバーがやって来る。

「…皆さん。」

「ねえ！渡瀬君は無事なの！？」

「は、はい。」

「よ、良かったー…。」

・彼女達は無事を確認すると煌二の顔を覗き込む…。

「こんなにボロボロになって…。」

「お疲れ様…ありがとう…。」

・口々に礼を述べて煌二に見守る…。

「渡瀬、お前はよくやったよ…。さすが私の生徒だ。」

・普段はひねくれ者のベツキーもこの時ばかりは素直に自分の気持ちを現わした…。

（煌二君…君は素晴らしい人達と巡り会えたね。）

・救護班が来るまで煌二を見守るC組達を見てG3は仮面の中で『フ…』、と微笑んだ。一方…。

『ハア、ハア…。ゴボ…ガフツ…。』

・桃月学園から遥かに離れた場所で、血を吐きながら…おぼつかない足取りで歩く者がいた。

『おのれ…おのれえええええ…アギト、め…ゴフツ…フー、フーッ…！』

・口から血と共にこぼれ落ちる恨みのこもった言葉を紡ぐ、アンノウン・フロツグロード…。

・実はアギトのトルネードブレイクを受けて死んだかの様に思われたが…なんと、あの一撃を受けて尚も生きており、現在はこの地に逃れ、体勢を立て直そうとしていたのだ…。

『おのれ…人間共がアア。ゲホ…ガハアツ…今度会った時に…皆殺しに…！！必ず…。』

『お前に「今度」は無い…ここで、死ぬ。』

・咳き込みながら血を吐くフロツグロード…そんな彼の背後から突然、何者かの声がした。

『誰だ…き、貴様ア！？』

『…答える気は無い。』

『なんだと…ゼエ、ゼエ…ふざけ…!?!』

- フロッグロードが顔を振り返して、その者の姿を見て身体を震わせる。

『な…なんだ貴様!?! 貴様も…あの忌まわしきアギトなのか!?!』

『…違うな。』

- フロッグロードは謎の存在をアギトと勘違いしたが、どうやら別の者らしい。そして気づけば…。

『な…!?! バカな…あ、有り得ん…。』 - 時間的にはまだ昼間のはずなのに、いつの間にか周囲は『夜』になっていた。

『ヒヤアアアアア…』

- この異常な現象にただ悲鳴するしか無く…。それは…彼自身に『永遠の闇』をもたらす兆候だった。

『食らえ…。』

- 謎の人物は足を高々と振り上げ、そのまま『夜』に浮かぶ満月に重なるかのようにハイジャンプ…。

『カアッ!?!』

『ギ…ゲッ!?!』

・そしてフロッグロードは急降下してきた謎の人物の蹴りに押し潰され、大爆発を起こし、今度こそ絶命する。

『フン…。』

・地面には何故かコウモリを模した様な、巨大な刻印が刻まれ、謎の人物はそのまま『夜』が晴れると共に消えていく…。

8 - 飛翔 - (後書き)

8、アギトの新しい力に関して新フォーム等を期待していた皆様には申し訳ありません…

『神の翼』自体は何か（正式名称忘れました）のカードイラストにあった八枚の翼を広げるアギトを参考にしました

必殺技は『カードウォリアー 駆斗戦士仮面ライダーズ』というホビーのアギトの技名から取りました

次回はエピソードと共に新キャラメインの話に移ります

9 - また、明日 -

(前書き)

エピソード的な話です。グダグダだったらすみません…。

9 - また、明日 -

- アギトとフロッグロードとの戦いから、はや三日…煌二はというと…。

「いや、入院って退屈なんだよね、これが…。」

「相変わらず凄い回復力だな、君は…。」

- 病院に搬送された当初は、あれだけボロボロの重傷になったにもかかわらず、三日でほとんど傷が癒えてしまった煌二を見て、正義は啞然とした…。

「けど、その様子ならば明日にでもすぐ退院出来そうだな…ん？」

『失礼しまーす。』

- 『コンコン』と、ノックと同時にドアが開かれるとそこには1 - C組の面々がいた。

- ベッキー・玲・6号・一条の四人、ついでにメソウサも見舞いにやって来た。

「皆…！」

「よ、元気そうじゃん。」

「アハハ…それほどでも。」

・玲の言葉に煌二は気軽に答える。

「渡瀬さん、ウサギさんがお花をお渡したいと言ってます。」

・一条が静かに、花を持ってプルプル震えてるメソウサに視線を移して話す。

「へえ、ありがとうな、メソウサ。」

「い、いえ…。あ…。」

・花を煌二へ手渡そうと、メソウサの手から花がスルリと抜けて、床に『パサッ』という音と共に落ちた。

「ウ、ウサギだから持てない…。シクシク…。」

「…オイオイ。」

・呆れた顔でシクシク泣くメソウサを見ながら、煌二は花を拾って花瓶に突っ込んだ。

「…ドンマイ。」

・一条は黒い瞳をメソウサに向け、サムズアップしながら励ました。

「さて、ウサギさんはお花ですが、私は渡瀬さんに『お友達』を用意してみました。」

「???」

「一条曰く『お友達』というものを煌二に渡した…。」な、何これ…？」

「渡されたのは横にしたジュースの缶に割り箸で足を四本作ってくっつけた奇妙なものだった。しかも…。」

（なんか出てる！？）

「『お友達』というかななるアルミ缶の飲み口からピチャピチャと明らかにジュースの残りらしき液体がこぼれた。」

「あ、ありがとう…一条さん。」

「いえ、どう致しまして…。」

「苦笑いしながら煌二は一条に礼を述べて、花瓶の側に『お友達』を置いた。」

「そういえば上原さん、桃瀬さん、片桐さんは今日来てないね？」

「ああ、都はちょっとベッキーの恩師の教授と一緒に昨日海外へ飛んだ。くるみは喫茶店のバイトで来れないってさ。」

「玲の説明によると、ベッキーの大学時代の恩師（？）である教授なる人物は都の母親の知人らしい。」

「その縁もあって、度々色んな国へ行き、イン。イー。ヨー。ズミ。たいな危険と波乱に満ちた旅をしているという…。」

「くるみは『エトワール』という喫茶店でウェイトレスのバイトを

していた。バイトの理由は本人曰く『弁償』。

・くるみがバイク事故で店のガラスに突っ込み、見事にガラスは粉碎、店長は頭を何十針も縫う重傷を負ったにもかかわらず、店長が心の広い人格者であったため、何とか弁償兼アルバイトで許してもらえたらしい。

「ふ、二人共、なんか凄い…だから昨日のうちに三人で来たんだね…。片桐さんは？」

「あいつは来てるけど…昨日病院で騒いで迷惑かけたから…今は締め出し食らって外にいる。」

「…あちゃゝ。本当だよ…。」

・煌二が窓から外を見下ろすと、病院の出入口で姫子は『マホー…』と非常に悲しい声でメソウサの様にシクシク泣いていたのが確認出来た。・昨日の回想…。

「ねーねー！渡瀬君ッ！」

「片桐さん！声のボリューム抑えて！ここ病院！オレは入院患者だからッ！！」

「静かにしなさいよ姫子！ムキーツ！！」

「三人共うるさいってば！！！」

・他の患者もいる病室ではしゃぐ姫子を止めようとする煌二と都。くるみは最もらしいことを言う。

「うるさいわよアンタ達！他の患者共に迷惑じゃろがいッ！！」

「ヒッ！？ふ、婦長さん…すみません！！」

・眼鏡に紫がかったパーマの髪、いかにも怖い感じの中年のおばさんの婦長が乱入、ドスの効いた声で一喝する。

「誰だい？一番騒いでた非常識なのはッ！？」

「「彼女です。」」

「マホ？私…？」

・全員一致で姫子を指した途端…。

「出てけ！ついでに病院には出禁じゃッ！！」

「マゝホゝ！？」

・襟首を掴まれた姫子は婦長にズルズル引きずられ、病室からつまみ出されてしまった…。

・回想終了。

「アハハ…あつた、あつた！そういうこと。」

「なんかすまん…。」

「謝らなくて良いつて、橘さん。結構楽しかったから。」

・煌二はケラケラと思い出し笑いしながら謝る玲に言う。

「あ、あの…渡瀬君…。」

「あ、6号さん。」

・6号がおそろおそると煌二に話し掛けてくる。

「御身体の方はもう大丈夫ですか…？」

「ああ、平気、平気！明日にはもう退院してOKだって。」

「良かった…。」

・それを聞いてホツとする6号。

「ま、本当は有り得ないんだけどね。普通の人間だったら死んでもおかしくなかったし…。」

・アギトの姿を思い浮かべながら煌二は頭をカリカリと掻いた。

「気にするなつて煌二君、あ、そうだな…治ったら何かおごつてあげようじゃないか？何が良い？焼肉かい？それとも寿司？寿司にしなさい。むしろ寿司以外有り得ない！あ、勿論クラスの皆さんも。」

・正義が突然こんな話を切り出した。何故か妙にテンション高めで、執拗に寿司ばかりを薦めるが…。「じゃあ私力二が良い！」

「…。。」「」「」

・締め出しを食らったはずの姫子が何故か煌二の病室にいつの間にかいた…。

「…婦長さん。」

「あゝっ！？いじわるはやめてよッ！！」

・煌二のいじわるな対応に一同で笑いだす中…。

「なあ、渡瀬…。お前、もう学校やめるなんてバカなこと考えて無いよな…？」

・一人、不安そうに語るベッキー。

「…大丈夫ですよ。宮本先生…。もうあんなバカな言葉忘れてください。それに皆…。」

・実は煌二は正義を通して全てを1-C組メンバー全員に話していた…。

・アギトのこと、アンソウンのこと、今までの数々の戦いのこと…。そして自分が戦う度に拒絶されたことも…。だがそれでもベッキー達は煌二を見捨てなかった。

「…ありがとう。先生。」

「…！…う、うるさい！」

・ベッキーは顔を赤らめ、病室から飛び出してしまった。

「あ！？宮本先生！！」

「はぁ…。素直じゃないんだから…。」

- 玲はため息混じりでベッキーが出て行った方向を見つめる。

「ベッキーもさ、昔、色々あったんだよ…。」

- 玲は突然、ベッキーの過去を煌二に打ち明けた。- ベッキーはMIT（マサチューセッツ工科大学）時代、当時、僅か9歳で大学に入学したとんでもない天才である彼女は今とは比べ物にならないほど感情を表に出さない少女だった。

- さらに研究や勉強にしか興味の無かったのが災いし、周囲から奇異の目で見られ、やがて孤立し、人間不信になったという。

「そんなことが…。」

「だからさ。境遇とかは違うけど、自分と渡瀬が重なって見えたのかもな。」

（先生…だからあの時…。）

- 煌二に対してベッキーは拒むことなく、『自分の生徒だ。』と言ってくれた。煌二はその理由に納得した。

「…おい。」

「せ…先生！？」

・ベッキーが突然戻ってきたため困惑する煌二。

「…渡瀬。」

「はい…。」

・普段、不機嫌かやる気の無い表情しか見せないベッキーは満面の笑みで言った。

「また明日な！」

「はい！！」

・渡瀬煌二…またの名を仮面ライダーアギトは、こうして、1・C組の一員となれた…。・ところ変わって、桃月町内…。

・そこにはとある寂れ、不気味な雰囲気醸し出す洋館があった…。

・洋館の一室のベッドに、一人の少年が寝ていた。

『おい、そろそろ学校の時間だぜ？起きな。』

・何者かが少年を起こすが…。

「…んん、あと五分。」

『いや起きろや！』

・…新たな物語はまだ始まらないし、そして新たな主人公もまだ目

覚めなかつた…。

9 - また、明日 -

(後書き)

9、エピソードにしては長くなりました。色々盛り込んでみましたが如何でしょうか？

次からは新キャラメインの話となります。主役交代です。多少は煌二達も出ます。

登場人物紹介・1（前書き）

今まで出たキャラをひとまとめにしてみました。よろしければ参考にどうぞ。

登場人物紹介・1

『ライダー & amp・怪人サイド』

わたし・コウジ
渡瀬煌二

容姿：後ろに短く結んだ髪、大人しそうな感じの表情

性格：落ち込みやすいがすぐに立ち直れる

趣味：バイクでの一人旅行

桃月学園・1-C組に転入してきた少年。

かつて仮面ライダーアギトとしてアンノウンと戦ってきた過酷な経緯があったにもかかわらず、前向きに生きている。

安い家賃のボロアパートに一人暮らし、桃月学園はバイク通学は禁止だが、こっそりマシントルネイダーまひき・マサイミンで通っている。（バイクはそのへんに駐車している。）真佐木正義

容姿：眼鏡、柔和な表情

性格：常に紳士的な態度

仮面ライダーG3-Xとしてかつて煌二「アギトと共にアンノウンと戦ってきた過去を持つ。

最初は煌二と敵対したがいつしか和解。以後、互いに協力するよう

になった。

誰に対しても紳士的な態度、それ故に彼を慕う部下が大変多い。

実はかなりの寿司好き、彼が何かおごると言うと言つと強制的・最終的に押し切られて寿司になってしまう。しかし本人はナマモノは苦手なため、玉子などしか食べない。フロッググロード

容姿：カエル、司祭の様な姿、両腕に巻かれた布

性格：丁寧かつ知的だがキレやすい

アギトⅡ煌二を狙って現われた未知のアンノウン。

別称は『ランキュラスⅡディクタトル（ラテン語で「カエルの独裁官」）』。

武器である『天命の錫杖』で魔法陣を出し、水に関する魔術めいた技（水の弾丸や間欠泉）を放つ。

また、腕の布で敵を捕縛する力もある。

丁寧な口調だが心の底ではアギトのみならず、人間全てを憎み、皆殺しにしようと密かに企むアンノウンの中でも最悪な存在である。
『ばにばにサイド』

レベルカ宮本

容姿：金髪・碧眼・天才

性格：負けず嫌い、揺るがぬ価値観、めんどくさがりや

通称『ベッキー』、日本人の父とアメリカ人の母を持つハーフ。

9歳でマサチューセッツ工科大学を卒業し、10歳で学位3つを取得するほどの天才。

基本的に低いテンションでやる気が無い。

天才らしく大人びた態度だがおぼけ・運動・料理など苦手なことに直面すると泣きながら逃げるなどまだ子供な部分もある。

生徒達から人気があり、悩みや相談を持ち掛けられることも多い。
メソウサ

容姿：ウサギ、涙目、常にうち震えた全身

性格：泣き虫、以上

いつもメソメソしているウサギだからメソウサと呼ばれていることとベッキーの側に常にいること以外詳細不明の不思議動物。

二足歩行したり言葉を喋ったり…本当にウサギなのかも不明。そしてウサギなので物をうまく手で掴めないという欠点も持つ。

大抵不幸な目にしか遭わずにメソメソ泣かされてしまう。片桐姫子

容姿：アホ毛、固めな髪質

性格：とにかく元気で世話焼き、単純、見たものに影響されやすい

校内に知れ渡ったほどのおバカ。赤点はしょっちゅう。

「マホ」や「オメガ」など意味不明な言葉を発する。

好物は力二。漫研所属なためか席にマンガ本があふれている。

ベッキーをこよなく愛してるが本人からは嫌がられてる。橘玲

容姿：長い黒髪、丸い眼鏡、スタイル抜群

性格：合理的・論理的・客観的・冷血で冷淡な部分もあるが不道德ではない

新聞部らしく高い情報収集力を持ち、目的のためなら手段を選ばないことから『C組の魔女』と呼ばれていた時期もあったが現在は丸くなっている（それでもSな部分は健在）。

C組一の秀才でもあるが、意外なことにUFOなどの非科学的なものを信じていたりする。桃瀬くるみ

容姿：容姿等はレベルが高めだが何故か地味。

性格：とにかく地味、反動からか自己顕示欲が強い。

勉強も運動も一通り出来るが个性的なC組で自分の個性が埋もれてしまってるため、『地味』とされている。

『地味』と言われることを非常に嫌うが本人が地味なのだから仕方が無い。たまに勢いで行動することがあるが全て空回りで終わって

しまっている。

時折その存在を忘れられてしまうことも…。上原都

容姿：赤毛・おでこ・はねっ毛・眼鏡

性格：堅実・生真面目・努力家・キレやすい

昔はかなりのガリ勉でヒステリーを起こしがちだったが今ではだいぶ落ち着いており、成績にこだわるのをやめている。

怒ると耳まで真っ赤になる。

意外なことに電化製品の修理など、機械いじりが得意。

現在ではベツキーの恩師『教授』に連れ回されて波乱と危険に満ちた冒険をやるハメに…。一条さん

容姿：引き込まれそうな黒い瞳・おさげ・特殊な空気

性格：いつでもどこでもマイペース・好奇心旺盛・誠実。

組学級委員長、とにかくマイペース、かつ、不思議な雰囲気で溢れており、どこかズレてる部分がある。

夢は母の様な家庭的な女性になること、下の妹が二人…小学五年生の次女と幼稚園児の三女がいる。

実は常人離れた何かを秘めている…？6号さん

容姿：ツインテール・デカいリボン

性格：真面目でよい子・純粹かつ素直・よく気が利く

本名『鈴木さやか』、あだ名の6号の由来は学園で6人いる鈴木さんの内の『6番目』であることから。

素直に人のいうことをよくきくためか、気の毒なことに、パシられていても全く気づかない。

10・朱樹紅牙・（前書き）

主役交代で新主人公登場、チラッとだけ煌二も出ます、そして全体的に短めです。

10 - 朱樹紅牙 -

『起きろアホ！遅刻すんぞ！！』

「…何で朝から元気なんだよ…キバット…。ふあああ…」

- 桃月町にある古い洋館…数ある部屋の一つである寢室のベッドで一人の少年があくびを出して目を覚ます…。

「眠い…。」

『この…！気合い入てやる！ガブツ！！』

- 突如、少年の頭に奇妙な喋るコウモリ…キバットバット三世が噛みつく。

「痛いッ！？や、やめてくれ、キバット！地味に痛いから！」

『…まったく、顔洗って着替えろ、そして飯食って学校しっかり行つてこい。』

「…へーい。」

- 少年は気怠そうに洗面所に行き、顔をサラッと洗い、水を頭にぶっかけ、髪を櫛で大雑把にガシガシと整える。

「…こんなもんかな？」

- 鏡で自分の顔を確認…。

・染めた様な中途半端ではない見事な美しさの赤い髪、クールな顔立ちだが、真紅の両の瞳の輝きが獣のようなワイルドさを醸し出していた。

「…朝飯、何にしよう?」

・寝ぼけまなこで少年はまだ脳が覚醒し切っていないのか…フラフラと危ない足取りでキッチンへ向かって朝食を作る…。

『…って、またそれかよ?好きだね…。』

「…良いじゃないか。ジャムはパンのベストパートナーなんだぞ?」

・少年は食パンにイチゴジャムを塗っただけのものをモシヤモシヤ食べた…残念ながらこれしか作れないようだ。

『…いつか栄養偏って死ぬぞ。』

「…本望じゃないか。甘いもので死ねるなんて。」

・少年は目をキラキラ輝かせて遙か遠くを眺めていた。

(絶対学校に友達とかいないだろな、こいつ…。)

・キバットは心の中で失礼なことを考えながら彼をジト目で見つめる。

「よし、じゃ…準備OK!」

こうしてこの少年・朱樹紅牙の日常がスタートした。
あかぎ・コウガ

- 遅刻してはいけけないので、紅牙はまず外へ出て、庭に停めてあつた血の様な真紅のバイクに乗り込み、エンジンをかける。

「キバツト…行つて来る。」

『ちゃんと勉強とかしろよ。』

「おかあさんか、お前は…。」

- 軽口を叩いて紅牙はバイクで家を出る…。 - 紅牙が通う桃月学園はバイク通学は禁じられてる。そのため、近場に一旦停めて、そこから歩いて通っているのだ。

「さてと…。あ、五十嵐先生…。おはようございます。」

「あら、朱樹じゃない。相変わらず良いバイク乗ってるわねー。」

- 紅牙はいつもこの場所で会う、髪をピンクに染めて、煙草を吹かす女性：1 - A組担任・五十嵐美由紀いがらし・みゆきに挨拶を交わす。

- 実は彼女もバイク通勤だった。ここで『教師が生徒への示しつかないでどうするの?』とか言つてはならない。

- 噂では彼女は元ヤンで、怒らせると生きて帰った者がいないとか色々言われてる。事実彼女は勤務中に堂々と酒などを呑んでるいわば不良教師だった。

- しかし彼女は気の良い姐さんみたいな存在で、しかも見掛けは美

人なので生徒の人気は高い。

「ほら、早く行かないと遅刻するわよ？アンタも2年になったんだからもっとシヤンとしなさい！」

「…先生、痛いって。」

・美由紀は気合いを入れる意味で紅牙の背中をドンと叩く。

・そこへ…。

「…よつと。」

・髪を後ろに結んだ少年がバイクでやって来て、二人のバイクの側に愛車を停める。

「ん？新顔ね？アンタもバイク通？」

「あ、はい。最近見つけたんで使ってますが…いけませんでしたか？」

「…いや、問題無い、君も良いバイク乗ってるな…。」

・紅牙は少年のバイクをジッと眺める。

「その赤いバイクもカッコいいですよ！…ええと…。」

「…朱樹紅牙、2年だ。こっちは五十嵐先生。」

「同じバイク仲間同士よろしくね。」

「え！？じゃ…先輩と先生ですか！オレは1年の渡瀬煌二って言います。よろしくお願いします！」

・少年・煌二は元気良く二人に名乗った。実は二人は『似た者同士』であるが、今はまだ互いに知る由も無かった…。・桃月学園・2年A組教室。

「…結局遅刻か。」

「そう思うなら反省しなさいよ！毎日毎日遅刻して！」

・教室に着くなり、紅牙は厳しい目つき、眼鏡に三つ編みの髪、そして見事な胸を持つこの2・Aの学級委員長にして風紀委員・朝比奈英理子に怒鳴られた。

「い、委員長…ごめんなさい。」

・彼女の叱責がよほど堪えたのか、紅牙は頭を下げて英理子へ謝罪した。

「全く、素直に反省するのは良いけど…ちゃんと次に生かさないという意味無いわよ！」

「まあまあ、いいinchよ、抑えて、抑えて♪」

・そこへおでこを出す様に髪の両サイドを結び、笑顔で接するチャリーディング部の女子生徒・天堂美貴子が止めに入る。

「天堂さんは黙ってて！いつも遅刻じゃ学級委員長の示しがつかない

いし、朱樹君のためにもならないんだから！」

・英理子は美貴子にガーツ！と勢い良く怒鳴り散らす。しかし美貴子はアハーと笑ってばかりでちつとも堪えない。

「まあ紅牙と委員長のやり取りは今に始まったことじゃないからね。」

「…和也。」

・黒髪に星柄のネクタイを着けた演劇部の男子生徒・高瀬和也たかせ・かずやも加わる。

「相変わらずにぎやかだな。お二人さんは。」

「ん。…ムニャ…。」

・紅牙は友人・和也に短く答えてさつさと席に着き、居眠りを始める…。

「ちよつと！？何寝てんのよ！話は終わって無いわよ！！！」

・英理子は紅牙を揺さぶるが、既に眠りの世界の向こう側へ行ってしまった彼を目覚めさせることは出来なかった。

「無駄だつて、委員長、紅牙は一度寝ると自分で起きない限りどんなに揺さぶっても起きないからさ。」

「…！！！」

・英理子は声にならない声で悔しがる。

「……ってか、お前ら、もうちょいで授業始まつから静かにしとけよ……。」

・タレ目の男子生徒で映画研究部所属の篠原雅人しのはら・まさとが全員に対して突っ込む。この場にいる誰よりも正論なため、反論が一切出来ない。

「「「……。」「」」」

「んゝ、ムニヤムニヤ……。」

・こんな感じで朱樹紅牙の一日は始まった。

10 - 朱樹紅牙 - (後書き)

10、朱樹紅牙…最初はクールな感じにしようと思いましたが何故かのんびりした人に…それと天堂なるキャラが出ましたが彼女は天の道を往き総てを司る男とは何の縁もゆかりもありません。次回も緩い日常編です。お楽しみに

11 - 気のいい海賊 - (前書き)

一カ月ぶりの更新…久々過ぎましたがなんとか出来ました。

ゆるーい、日常編です。

11 - 気のいい海賊 -

- 2 - A組・英語の授業中…。

「んがー…んがー…。」

- 授業中に堂々と爆睡を決め込む生徒…英語教師は額に青筋立てながら『彼』を睨む…。

- 2 - A組・朱樹紅牙といえば1 - C組の校内に知れ渡ったバカ・片桐姫子に並ぶ程、有名な眠りの深い問題児…。

- しかし。

「あ、朱樹！いい加減に起きろ！！おい、この問題をやれ！」

- 教師が紅牙を怒鳴る様に起こして黒板に書かれた英文の和訳をさせる。

「ふああ…『失った誇りを取り戻す…まさに、汚れなき戦い。』です。」

「せ…正解…。」

「ムニャムニャ…んがー…。」

（くーッ！！そしてまた眠るんかい…！？）

- 紅牙は見事に正解を言い当て、再び深い眠りにつく、その様子を

見て英語教師は心底悔しい気分になる。

・問題児と言われるが、何故か理不尽なまでに成績は優秀、故に教師も文句が言えない…そのため、一部を除いて教師一同は紅牙を相手にしないのが常識となっている。

（起きて授業を真面目に受ければ良いのに…。）

・英理子は隣りの席の紅牙を呆れた表情で見ていた…。

・一方、別の席では…。

（ねえねえ…あっちの席に見慣れない男の子と女の子がいるんだけど…誰？）

・美貴子の前方の席には金髪の背の低い少女と髪を後ろへ短めに結んだ少年がおり、そのことで左隣りの席の和也に尋ねた。

（それが今回の『面白い事（メインディッシュ）』だったりするんだよねえ。）

（おい…まさか…。）

・和也の右隣りの席の雅人は嫌な予感がした…高瀬和也という男は時折誰もが予想だにしないことを企み、変にトラブルを招くだけでなく、さらに事を大きくする男だということをよく知っていたからだ。

（実はな…。）

- 『やはりか』、雅人は和也が言い切る前に自分の悪い予感に確信を得た。（宮本先生と一年生を拉致してきた。）

- 和也がとんでもない発言を言った瞬間、雅人と美貴子の顔が凍りついた。

- 彼等の前の席の女子の制服を着せられたレベッカ宮本…通称・ベツキーが後ろの三人に向かって怒りの形相で睨んできたのが確認出来た。

- そしてもう一人、ベツキーの担当クラスである１－Ｃ組の生徒・渡瀬煌二は『ここどこですか！？』と言いた気な様子で周りをキョロキョロ見渡していた…。

（（何やってんだよー！？））

- 雅人と美貴子は心の中で叫んだ。しかし、こんなふざけたことをやらかした和也は満足そうな笑みを浮かべていた。

「？」

（（ヒッ！？））

- 突如、英語教師が振り返る…ベツキーと煌二をチラリと見て『こんな奴等いたか？』と疑問を持つが『気のせいか…』だと思い、再び黒板に字の羅列を書いていく…ベツキーと煌二は動揺したのか、かなり拳動不振だ。

（すまん、前言撤回だ…見てるこっちが心臓に悪い）

（いくらお前でもこればっかりはやり過ぎだぞ。）

・今さら後悔する和也だった…雅人は完全に呆れ顔だ。

（そういえば男の子の方は知らないけど、高瀬君もしのつちも先生と仲良いんだよねー、いいなー。）

（部で何度か、お世話になってるからね。）

・演劇部の和也や映研の雅人はベッキーにこれまで協力してもらったことがあるため面識・親交（？）があつた。そのことを美貴子がうらやましがる。

・ここでベッキーはさらに不機嫌さを露にした顔で紙に何かを書いて三人に見せた。

・紙には殴り書きで『ふざけろ！殺すぞ！』と書かれてた。ベッキーの横で煌二が『先生、落ち着いて！』と書いた紙をベッキーに見せていた。

・三人は突如、ただならぬオーラを感じた…和也は『志。ーッ！後ろ！後ろ！』と書いた紙をベッキーと煌二に見せた。

（ヒイイイ！？）

・煌二はベッキーの真横にいた人物…学級委員長・朝比奈英理子の怒りの形相をまともに見て、心の悲鳴をあげた。

・ベッキーは涙目で三人に向かって『もすけて』と書いた紙を見せた…どうやら恐怖のあまり『た』と『も』を間違えてしまったよう

だ…。授業が終わり、休み時間…。

「何やってんですか！宮本先生にその君ッ！！」

「知るかーッ！！高瀬に拉致られたんじゃー！！」

「そうですよ！いきなり先輩がオレ達二人を…。」

・さかのぼること一時間前。

「授業するのめんどくせー。」

「生徒の眼前で言う言葉ですか？」

・1・C組へ向かうベッキーと煌「…だが。」

「やあ、宮本先生と…もう一人いるね。」

「あ、高瀬。」

「？」

・挨拶を交わした途端…。

「「わーッ!？」」

・二人は和也に強引に腕を掴まれ、気づけば2・A組にいた、という事だった。

「…っていうか、オレは一年生ですよ！何故二年生のクラスに…！」

「？」

「すまんすまん…本当は宮本先生だけ連れてくつもりだったけど、もう一人追加したら面白いかなー…と思ってね。」

「おい！？」

「拉致なんかしておいて悪びれぬ顔をする和也の顔を見て二人は叫ぶ。」

「はあ…全く、みんな学校をなんだと思って…」

「英理子は溜息をつきながら被害者の二人や自分のクラスメイトを眺める。」

「ふあああ…何の騒ぎだよ、和也…？」

「よ、紅牙。お目覚めかい？」

「今まで眠りについてた紅牙が目を覚まして見慣れぬ二人を怪訝な顔で見つめる…」

「「あ。」」

「煌二は紅牙を見て、互いに声を上げる。」

「朱樹先輩！？このクラスだったんですか？」

「煌二って言ったっけ？君、何してんの？それと…誰？」

「お前ー！！渡瀬は知ってて何で私は知らないんだよ！？この赤毛
！」

・意外な形で再会した紅牙と煌二…ベツキーは自分を知らない紅牙
に腹を立てた。

「全く…。」

・ベツキーは紅牙・和也・雅人・英理子・美貴子の五人を眺め…自
分の感想を正直に述べた。

「…とんでもない罠にかかってしまったかな…ひどいクラスだ。」

「ようやくわかったんですか？」

・ベツキーの感想に、笑顔で答える和也だった。

「はい、嫌な予感がするので…いや、それしかないので帰ります。
はい。」

「…オレもそんな気がするので帰らせてもらいます。」

・二人が足を動かそうとした瞬間…『ジャラ。』

・鎖を引きずる様な音が聞こえて足元を見ると…二人の足首になん
と、鉄球おもしが付いた鉄製の枷が着けられていた。

「おわー！！お前ら、海賊か何かかー！？」

「…っていうか、こんなもののいつの間に！？」

「これでは帰ろうにも帰れない…」

「最高の褒め言葉ですよ。」

「高瀬君、ちょっとやり過ぎじゃないの!？」

「満足そうな笑顔で和也は喜ぶ、英理子は和也のいき過ぎた行為に怒りが込み上がる。」

「いいんちよーだって拘束されるの好きなんですよ?」

「バカじゃないのあなた!？」

「『アハー』と可愛らしい笑顔で爆弾発言を言う美貴子に英理子は『ガーツ!』と怒りを爆発させる。」

「え?委員長つて、ドMなの…?」

「あんたも真に受けるなつての!！」

「紅牙はドキドキしながら英理子に真意を尋ねるが…生憎と英理子にはそんな性癖は無いのでキツパリと否定した。」

「大丈夫だよー。こういうクラスだから、気の良い海賊だと思えば!！」

「『アハアハ』笑いながら美貴子は二人を安心させようとした。」

「はあ…。」

- 煌二はおずおずと美貴子の言葉にうなづく…だがベッキーは…。

「ヨーソー。」

- 先輩芸人にいじられる後輩芸人の如く、2 - A組の面々にいじられ、死んだ目で意味不明な言葉を呟いていた。

「先生ー！？しっかりー！！」

- 煌二の叫びが2 - A組内でこだました…。

- オマケ・その頃の1 - C組の一年生達…。

「そーいえば、ベッキーと煌二君が2年のクラスに拉致られたんだってさー。」

「ええ！？煌二君と先生が…！？」

「まあ、良い経験だろ…。」

- 心配そうな顔をする姫子と6号とは対照的に、読書しながら冷静に会話する玲。

「大丈夫カナー、いじめられたりしてないカナー。」

「ふえ！？」

- 姫子の発言にオロオロとろたえる6号。

「お前は二年生をなんだと思ってるんだ？」

「だって二年生なんだよ！四天王やエリート戦士とか今までとレベルが違う上位ランクのモンスター達なんですよ！！」

・明らかにゲームのし過ぎみたいな発言をする姫子の脳裏には、無残にも上位モンスター達との戦いに敗れる勇者のイメージが浮かんでいた。

「二年生になる頃には玲ちゃんも6号さんも一条さんもー！！」

・『マー！』と勢い良いノリを見せる姫子。

「！」

・姫子の視線に気づいた一条は気取ったお嬢様の様なポーズで二年生らしさをアピールした。これが彼女の精一杯だった。

11 - 気のいい海賊 - (後書き)

11: 2 - Aのトラブルメイカー? 高瀬和也によってベッキーと煌二はいじられまくり。天堂のセリフ通り、みんな気のいい連中です。次回は日常の終わりと共に不穏な影が…

ちなみに紅牙が和訳した英文はボボボーボ・ボーボボのサービスマンがヘッポコ丸にリベンジを果たす際に言ったセリフです

12・危険な夜・（前書き）

まだまだいじられ続けるベッキーと煌二の二人…そして迫る『非常事態』…

12 - 危険な夜 -

- 2 - A組。

「朝比奈っていつもこんなにキツチリピリピリしてるのか？」

「そういえば…よく疲れませんね。感心しますよ。」

「別に、これがいつもどおりですが。」

- ベッキーと煌二は常に気難しい顔の英理子に何気ない質問をする
が、英理子は顔色を変えずにキツチリ答えを返す。

「そーいえば、確かにいーんちよーって朝も昼もいっつも怒り顔だ
よね。」

「別に良いと思うけど？」

- 美貴子の言う事はほぼ事実である。朝比奈英理子は風紀委員故に
常に厳格な態度を崩さず、問題ある者は生徒だろうが教師だろうが
ズバズバと指導する。

- 彼女はよく融通の利かないお堅いうるさ型な委員長と思われがち
だが、その姿勢に反して男女問わず人気が高い。

「けどさ、堅苦しくて先生も一年生君も困るだろうし…それじゃ。」

- 和也はベッキーと煌二を気遣い、英理子にとんでもない提案を出
した。

「朝比奈さんをこれから『エリタン』と呼ぶことにしよう…名前、英理子だし。」

・瞬間、英理子は絶句する…自分のイメージとまるで合わない可愛らしいアダ名をつけられたから当然の反応だ。

「なんでエリタン？」

「フレンドリーな委員長をアピールしようと思ってね。よろしくエリタン。」

・紅牙の疑問に和也が理由を告げつつ早速その名を呼ぶ。

「エリタン。」

「エリタン。」

「じゃあ…エリタン。」

「よろしくです。エリタン先輩。」

「エリタン言うな…ッ！アー…！」

・雅人、美貴子、紅牙、煌二は次々に英理子…もといエリタンと呼ぶ。英理子は羞恥のあまりに顔を真っ赤にしながら『ガーッ！』と吠える。

「…エリタンです。よろしく…。」

「ヒイイイ…。」

・怒りにうち震えながら英理子はヤケ気味でベッキーにフレンドリーさ(?)をアピールしたが肝心のベッキーは涙目で完全にビビっていた。「しかし…今のオレ達って、なんでしょうかね?」

・見知らぬ先輩に拉致られた挙げ句に逃げられない様に足枷をハメられ、ベッキーはいじられ…端からみたらかなりカオスな現状だった。

「本当もつさー、奴隷だよ、奴隷…。」

・ベッキーは諦めたか、机に突っ伏し、無気力になっていた。

「先生!せつかくなんで写真撮りましょう!一緒に!」

「おいおい…天堂…。」

・何の突拍子も無く美貴子が突然過ぎる提案を出す。実はベッキーのことを一目でかなり気に入ってしまったらしく、美貴子はベッキーの愛らしさに夢中になっていた。

「もー…天堂さん、いい加減にしなさい。」

「だってー、こんなチャンス滅多にないしー。」

「いいよもう…なんでも来い。」

・開き直ったベッキーは無気力に、投げやりに美貴子に許可を出したがこれが『大間違い』であった。

「アハー！じゃあ思い切ってネコミミ付けよう。」

（こいつもバカの一味だーッ！！）

・ベッキーが彼女…天堂美貴子がバカであることに今気づき、後悔したが時既に遅し。

「ついでに君も。」

「オレもー！？」

・煌二も後悔したが時既に遅し。そして…。

「キャー！！二人共！可愛いですよー！！」

「一応教師なのですが…。」

「うつ…ひどい…。」

・見事なまでにネコミミ頭になってしまったベッキーと煌二。特に煌二は精神的ダメージが大きかった。

「プッ…クク…す、すまん…。」

「うわー！！」

・煌二は笑いを堪える紅牙の姿を見て泣き出してしまった。

・だが美貴子の暴走は止まらなかった。

「次はツインテールにしてみようか？」

「誰か止めるオオオオオオッ！！」

- 2 - A組教室にて、本日一番の断末魔が二人分響いたという…。

- その結果。

「お二方、気分はどう？」

「すみません、みんなが悪ノリしてしまっ…。」

- 和也はネコミミ+ツインテールの二人に感想を、英理子は謝罪をした。美貴子はというとメチャクチャ嬉しそうな顔で二人を眺めていた。

「…海賊に捕まった貴族の気分ですが、何か？」

「…同じく。」

- もはや二人は精も根も、涙もとくに枯れ果てた。とにかく疲れただけ…特に精神面で。

- 一方。

「面白いことになってると聞いたけど何力ナ～？」

「アレじゃないか…？あのはしっこの二人。」

「え、ええ…？」

・ 姫子と玲、6号の三人はやはりいつまでも来ないベッキーと煌二を心配し、2-A組まで迎えに来たのだ。しかし。

（（（???）））

・ 某ボクサーの様に真っ白に燃え尽きたネコミミ+ツインテール、鉄球のついた足枷付き姿のベッキーと煌二、状況が飲み込めない三人はただただ『？』を頭上に旋回させていた。

「「ヨースロー。」」

・ 二人は死んだ目で床を眺めながら意味不明な言葉を八毛る様に呟いた…。 - 夜。

「全くもう！二年の奴等め…！！」

「でもベッキーも煌二君も可愛かったカナー！」

「私も…その…煌二君、似合っていましたよ。」

「二人共！お願いだからオレ達の心の傷口を広げないで！」

・ 実は煌二・ベッキー・姫子・6号・玲の六人は未だもう生徒や教職員がほとんど帰ってしまったというのに学校に未だに残っており、ベッキーの研究室で二人を慰める意味でゲームなどをやりながら遊んでいた…ちなみに玲は爆睡中であった。

「それにあの赤毛！あいつも気に入らない！」

「先生…赤毛じゃなくて、『朱樹』先輩です。そうですか…オレとしては…」

・校内で少なくともかなり有名な自分…チビッコ天才教師・ベツキ―を知らない無気力な二年生・朱樹紅牙に対してまで憤慨していたので煌二は弁護しようとしたが…。

『プツ…クク…す、すまん。』

・笑いを堪える紅牙の声が煌二の脳内でリピートされ、やがて…。

「…やっぱり許すかアアアアッ！！」

・悪気は無かったとしてもアレはヒドかった…煌二は怒りの絶叫を上げた…。

・所変わって、校内の廊下では…。

「…ここもチェックOK…っと。」

・英理子は一人、学校に残って教室を見回りをしていた。責任感が非常に強い彼女は妥協せず一つ一つ異常が無いかチェックしていた。

「…夜の学校って何か出そうで嫌な感じだわ…。」

・英理子とて人の子…昼間と違って不気味な静寂に包まれた学校特有の雰囲気不安を覚えながら廊下を歩いてく…。・その頃、夜の桃月町では無数のパトカーのサイレンの音が鳴り響いていた。パト

カーの中では警察官達が互いに連絡を取り合っていた。

『緊急事態発生！大田区足柄で現金輸送車襲撃事件発生ッ！！』

『犯人は殺人容疑で全国指名手配中の毒島竜平、他三名ッ！！犯人の車は桃月町方面に逃走したことですッ！！』

「مامウ…もう、うるさいなッ！なんだよこの音！！何の音！？」

「お前を迎えに来た音じゃね？」

・研究室で遊んでた姫子は絶えないサイレンの音に対してプリプリ怒り、ベッキーは軽いジョークを飛ばした。

・学校の外にて、窓を強引にこじ開けて四人組の男達が入り込む…。
四人はそれぞれマスクや目出し帽に黒ずくめの服装とあういでたちだった。

「…仕方ねえな、とりあえずここで警察共が静まるのを待つか…。」

・ホッケーマスクに黒いパーカー姿の大柄な男、リーダー格の毒島竜平は吐き捨てる様に呟く。

「すいません、毒島さん…手違いでこんなことになっちまって…。」

「気にするな、どうせ車は捨てる予定だったんだ。次の探せばいいってことよ。それまで…この学校で少し休ませてもらおうじゃないか？」

・マスクの奥底で凶悪さはらんだ眼をギラつかせる毒島の意見に

よって現金輸送車襲撃事件を起こした凶悪な犯人グループは桃月学園に潜伏を決め込んだ…。

『新たな情報だ…犯人グループが逃走に使った車が桃月西口公園で発見…！』

『犯人は現在この桃月町周辺に潜伏している可能性が高い…近隣住民への十分な警戒も怠りなよッ！』

『『『了解ッ！…！』』』

・だが、警察官達の懸命の捜査も虚しく、毒島達は桃月学園の廊下を平然と練り歩く。

・そんな緊急事態に全く気づかないベッキー達、そして英理子だった…。

12 - 危険な夜 - (後書き)

12、前半は緩く、後半から急激にヤバい展開にしてみました。
次回は犯人グループと煌二達が鉢合わせに…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0337i/>

MASKED RIDER'S -PEACH MOON STORY-

2010年10月15日01時20分発行